

コロナ新派生型、欧州でも警戒 「EG・5」、バカンスで増加も

8/12(土) 共同通信



【パリ共同】中国や日本など東アジアを中心に感染例が増えている新型コロナウイルスのオミクロン株派生型「EG・5」に、フランスなど欧州諸国でも警戒が強まっている。現段階では緩やかな増加にとどまっているが、祭りなど人混みの多いイベントがめじろ押しのバカンス時期にウイルスがまん延する可能性も指摘されている。

世界保健機関（WHO）は9日「EG・5」を「注目すべき変異株（VOI）」に指定。7日時点で、51カ国で確認され、うち中国が30.6%、米国が18.4%、韓国が14.1%、日本が11.1%を占めた。欧州は英国が2.0%、フランスとポルトガルがそれぞれ1.6%となっている。

フランスの民間緊急医療サービス「SOSメドサン」によると、7月31日から8月6日の週で新型コロナの疑いがある診察は前週比84%増。レゼコー紙電子版は11日、こうした数値を紹介し「この夏、コロナが（再び）悪さをするかもしれない」と伝えた。英国などでも新派生型の増加傾向が報じられている。

コロナ新派生型、警戒対象に指定 WHO、「EG・5」

8/10 共同通信

【ジュネーブ共同】世界保健機関（WHO）は9日、中国や米国、韓国、日本などで感染例が増えている新型コロナウイルスのオミクロン株派生型「EG・5」を「注目すべき変異株（VOI）」に指定した。重症化率の変化は確認されておらず、公衆衛生上の危険性は低いと見ているが、免疫をすり抜けるなど感染力が強くなっているため、警戒を呼びかけている。

VOIは、最も警戒度の高い「懸念される変異株（VOC）」より1段階低い位置付け。

EG・5が世界全体の感染例に占める割合は6月19～25日には7.6%だったが、約1カ月後の7月17～23日には17.4%にまで上昇した。

一般社団法人共同通信社